

周恩来時代は何だったか

後もないであろうと言っている。
中国の変化を見てみると、六九年四月の党大会で、林彪が毛沢東の後継者に選ばれて政治報告をやったわけで、その外交政策は、社会制度の異なる国との平和共存ということとは言っているが、やはり反米、反ソの統一戦線を世界に呼びかけるという形の、これまでのいわゆる世界革命戦略、基本的には中間地帯戦略ののっついている。
ところが僅か五カ月後の九月頃から、中国外交に変化が現われ出した。いままでは、国連は米ソの支配の道具であるとして、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの急進諸国を糾合した第二国連・革命的国連を中国が唱えるという国連敵視の外交姿勢をとっていたわけですが、ところがその国連に中国は合法的権利を持つて持っているんだと言いつ出した。中国の政策の変化は、いままで言わなかったことを言い出すとか、いままで使っていたパターンを使わなくなるといふ時に変化が現われてくる。
もう一つは、ベトナム戦争の政治的解決についてで、中国はこれに非常に反対していた。ソ連の北ベトナム援助も、ベトナム人民

を和平に引きずり込むための米ソのベテランであるという見方をしていましたから、ホー・チ・ミンがベトナム協定について毎年記念日にメッセージを出すと、そこからジュネーブ協定という言葉が全部はずして発表する。明らかに政治的解決に反対の姿勢をとり、徹底抗戦あるのみというのが中国の態度だった。だからベトナムの解放戦線の和平提案に基づいて、アメリカと北ベトナムがパリで二者会談を始めた時も、これを国内で伏せていた。
ところがこの頃から、中国は解放戦線指導者の北京での演説をそのまま引用することにより、パリ会談が始まったということを知らせた。この時にベトナム戦争の政治的解決という方向へ中国は動き始めたわけだ。

この二つが非常にはっきり現われたのは、六九年の九月で、毛沢東・林彪の外交路線とかなり違うものが出て来た。これが端緒になって私は『周恩来の時代』を書いたわけですが、恐らくその時の周恩来の戦略は——文革は終わった。中国が国際的に閉鎖国家であり、自力更生でやって来た経済政策は、毛沢東の大躍進あるいは文革によって非常に停滞している。また各国との技術格差が非常に大きくなっている。これはいかんというので、国内のことを中心に据えながら、まず自分が得意とする外交分野で国際環境を整えて、外側からの新しい風を内部に吹き込もう——と考えたんじゃないか。
ですから、この時期から特に七五年一月の全国人民代表大会に至る約六年間を私は周恩来の時代と規定するわけです。
その時代までは周恩来は、行政実務家であり、收拾役であり、あえて言えば毛沢東の忠実な行政官あるいは毛沢東路線の執行者であったと言えるけれど、六九年秋以降の周恩来の展開した行動は、明らかに毛沢東の忠実な行政官の枠を超えた、そして彼がいなかったならば新しい内外戦略あるいは毛沢東以後に備えた政治指導体制というものは恐らく出てこなかったというほどの創造的役割をした。そういう点において、独自の政治的指導者としての周恩来の像が浮かび上がったと見ていい。

特集 周恩来の光と影



周恩来時代は何だったか

六九年秋以降

編集部 『周恩来の死』ということを一つのきっかけとして、周恩来の人間像というもの長い中国共産党の歴史の中で周恩来の果たして来た役割を中心としながらお話ししていた

だきたいと思えます。

柴田 私は『周恩来の時代』という本を、一九七一年の後半に出しました。また林彪失脚後の七二年初頭頃、ロベール・ギランたちが北京に行き、「ル・モンド」で『周恩来時代の中国』というタイトルで連載を書いて

柴田 穂
中嶋 嶺雄
(サンケイ新聞論説委員)
(東京外国語大学助教授)

る。その頃から『周恩来の時代』とか『周恩来時代』という言葉が使われるようになったが、それを使う人はそう多くなく、この言葉についてはかなり批判もある。たとえば、台湾の人たちとディスカッションすると、周恩来の時代というものはかつてなかったし、今



柴田 稯氏

毛・周間の緊張と緩和

中嶋 毛沢東との関係で周恩来がどうであったかということは、周恩来評価の一番大きなポイントだろうと思う。

革命の初期から遵義会議までは周恩来が党内の組織、あるいは軍事面においても力をもっていたし、毛沢東と意見の違いもいろいろあったと言われているが、遵義会議以後は毛沢東支持に変わっていった。

それから解放後の歴史を見ても、大躍進政策の時は、どちらかというとは是非非の立場をとり、自らが内政の第一線に立つことをやめておきながら、大躍進政策の失敗、挫折の中で、国家主席が劉少奇に行くような呼び水

を作っている。そして六〇年代前半のいわば実権派の時代にも重用されるという、非常に周恩来らしい生き方があったと思う。しかし一貫して見ていくと、毛沢東との間は、車の両輪といった単純な形ではない、非常に複雑な関係があったと思う。

いわばそういう毛・周間の複雑な緊張と緩和の関係が、一つのサイクルとしてあった。そのことが中国内政に非常に大きな意味を付与したという気がする。

いま柴田さんから周恩来時代という考え方が出されましたが、六九年の転換以降を見ると、九全大会はやはり林彪の時代を作り上げたのだと思う。林彪の時代の中でだんだん周恩来時代がダブって出て来る。つまり、六九年からいわゆる周恩来時代が来たのではなく六九年からしばらくは、むしろ林彪の時代とも言える感じで、軍幹部がものすごく政治の前面に出て来ている。

それは、どちらかというとは是非非の立場をとり、自らが内政の第一線に立つことをやめておきながら、大躍進政策の失敗、挫折の中で、国家主席が劉少奇に行くような呼び水

たけけれども、仮に病気でなかったとしても、周恩来の活躍は、すでに制約されたんじゃないか。少なくとも毛沢東が亡くなるまで周恩来が活躍する場所というのは、なかったかもしれないと思う。その点が柴田さんとの評価の違いです。

にもかかわらず、今後の中国を見てゆきますと、やはり、死せる周恩来、中国を動かすということになっていくんじゃないか。今後、いかに周恩来に対する批判、あるいは周恩来的なものに対する批判があるうとも、一つの潮流を作っていたという点で、やっぱり大きな夢があったと私は見るのです。

周恩来時代は何だったか

ただ、柴田さんと評価が違うところは、七三年夏の十全大会が周恩来時代の一つのピークだったと思うけれども、あとはどうも周恩来は守勢に立たされたんじゃないかなるか。そして批林批孔運動が起り、水滸伝批判、あるいは教育革命論争が起るわけだが、これはどうも周恩来的なもの——私は周恩来個人と見るわけですが——に対する批判が内部的に潜在していた。従って去年一月の人民代表大会の周恩来の演説は、彼の最後の出番だったのではないかと思う、それ以後は病気になる

たけけれども、仮に病気でなかったとしても、周恩来の活躍は、すでに制約されたんじゃないか。少なくとも毛沢東が亡くなるまで周恩来が活躍する場所というのは、なかったかもしれないと思う。その点が柴田さんとの評価の違いです。

周恩来外交に乗る毛沢東

柴田 林彪時代と周恩来時代のダブルとてろで周恩来はいわゆる周恩来外交を展開していった。ところが林彪外交演説とは違っていた。そこでは毛沢東はその時一体何を考えていたかについては、かなりの論争がある。

最近、鳥居民さんが『周恩来と毛沢東』という本を書いているが、周恩来が毛沢東の言う通りに米中関係の改善をしたという日本な

橋のような勢いすら感じられた。黄永勝は林彪系の中でもかなり実務派ではないかというような感じさえあった。

そういう複雑な絡みの中で、やがて周恩来の「脱文革の潮流」が出て来た。それが柴田さんのいわれる周恩来の時代だと思う。

文革後を考えると、林彪の時代と周恩来時代との内部的な角逐は、周恩来時代の方が拡大していくのに対して、林彪時代は逆に終息していくわけだが、そのプロセスが実は林彪事件の大きな背景じゃないかと私は見ます。

論理的に考えれば、林彪事件はいわば軍官僚、軍幹部の台頭を意味している。私はそれを兵営国家、兵営体制と呼びますが、いたるところに軍幹部がいるという状況です。中国は革命以来、まさに軍が民衆の体現者であるから、軍がいくら出て来ても軍事独裁とか兵営国家とはいえないという意見もあるが、実際にはそうでなく、軍官僚の台頭は周恩来にとっても毛沢東にとっても脅威だったと思う。

それを打倒したのが林彪事件であり、そういう点で林彪事件は、軍官僚に対する行政、あ



中嶋 嶺 雄氏



冷たいビール。暖かい心。
サッポロビール。

本場の味 ミュンヘン サッポロ シルウォーキー。

とにあったと言える。そういう意味で米中接近、あるいは林彪事件というのは、やっぱり周恩来時代を形成する非常に重要なモチーフじゃないかと思う。

非毛沢東化への二つの布石

中嶋 周恩来と林彪の関係は、文革の九全大会以降は周恩来対林彪であると同時に、周恩来対毛・林だったと思う。毛沢東は後に言って林彪はけしからんというようなことを言っているが、それはとんでもないことで、本心はそうだったにしても、政治という公式の立場からすれば、とにかく毛沢東が林彪を引き上げ、後継者として民衆の前に紹介して、

あれほど和気藹々として天安門の上で手を握っていたという事実は消せない。こういう毛・林の連合を、とにかく打倒しなければいけないという非常に秘められた戦略が周恩来の中にあっただけじゃないか。毛沢東に橋突くことはできないから、林彪と対立する。それで毛・林連合の分断を図る。周恩来がそこまでうまく駒を動かすように全部考えたのではないにしても、結果的にそうなったのだと思う。だから林彪の失墜は、毛沢東にとってもプレステージの失墜であるわけで、それによって、中国の党の幹部の中に、毛の責任を感じた人は当然いるだろうと思う。同時に、それに関連していたサブリーダー

発案者はあくまでも周恩来だという見方が非常に多い。ところが先ほど中嶋さんが指摘したように、日本では周恩来が絶えず毛沢東路線の忠実な執行者であったという見方が強いのですが、そういうことを見る限り、周恩来時代」ということも言えないし、同時に中国の外交政策の転換ということも出てこない。つまり外交の原則は変わらず、その適用の仕方を変っただけだという説明で終わってしまう。それは米中会談で、ニクソンが訪中した時にも言えることで、中国内部で「重慶交渉について」という論文が出されたが、重慶における国共交渉と同じような意味で、米中交渉もまた闘争の一環であるという説明をするのは、中国の内部としては当然だと思う。アメリカ帝国主義は世界人民の最大の敵であり、ニクソンはその頭目であると言っているが、そのニクソンが、北京空港で解放軍を閲兵するわけだから、これは中国の外交政策の転換だと認めなければならぬわけです。ところがこれを認めようとしなかった。ここに日本の中国研究のリアリズムの欠如があるわけで、一種の観念論や原則主義に流されるとい

林彪の真の敵は誰だったか

う中国研究の遅れた部分を痛感しますね。だから林彪事件も、確かに軍幹部対党という関係で毛沢東と周恩来あるいは江青たちが連合して、その結果として林彪が失脚したということは、私もその通りだと思うけれど、では林彪の真の敵は誰だったのか、果して毛沢東だったのかという疑問が残る。文革後の政治構造から見ると、林彪は毛沢東によって後継者に選ばれたし、毛に次ぐ第二の地位を党の中でもっていた。だから、党が非常に大きな指導力を持っているとすれば、また毛の力が依然強い状況の中では、林彪は何もしなくても後継者に成り得たわけだ。ところが文革がまさに党の力を壊してしまったので、彼の地位は安定したものではなくなる。それがつまり周恩来の國務院の一つの省としての国防部長でしかなかったということです。だから林彪にしてみれば毛沢東の後継者と言われても実権を握っていないという将来に対しての不安がつきまとう。すでにその一年前に陳伯達が失脚しているし、やはり毛沢東の地位

の低下あるいは象徴化傾向、そして毛沢東路線があの激しい文革にもかかわらず定着しないということに対して、最も不安を感じたのが実は林彪だったといえるだろう。そうすると林彪の真の敵は、国家行政部門を握っていた周恩来だったということになる。だから林彪は全国人民代表大会を開き、新憲法を採択して、国家主席という地位に付きたかった。そのための政治的な調整もいろいろ行ったと思う。恐らく陳伯達と一緒にやっただろう。一方陳伯達にしてもその時、総理ぐらいを目指していたのかもしれない。しかしそういう政治的な画策が、陳伯達の失脚により失敗してしまう。そうすると残るのは軍事的非常手段によって実権を奪取するしか道はない。それが、いわゆる林彪のクーデターといわれるもので、それは計画段階であったのか、部分的な実践段階であったのかということとはわからないが、恐らくそういう画策があったであろうと考えられる。それから自然に察知されたということですね。ですから真の対立は文革路線を継承しようとする林彪と、脱文革の穩健路線を指向している周恩来



空海陸
すべてを
通から
日通

通
日本通運

来にとつては非常に無念だったと思う。われわれとしては周恩来戦略というものが、いつか開花するのを見てみたかったという気がするんです。

そういう意味で、私は単純にこの問題を考えない方がいいと思う。私の仮説は仮説にすぎませんが、少なくともそういう仮説を導入してみない限り、毛と周がいつも一致していたとか、車の両輪であったなどという単細胞的な見方では中国政府のダイナミズムは掴めないと考えます。

編集部 解放までの歴史の中でもそういうことがあったんじゃないですか。

中嶋 そうですね。たとえば西安事変は、

解放前の中国革命史の中で、非常にドラマティックな事件です。一般的には周恩来は結局西安事変で蒋介石に内戦の停止、抗日を説得したりしたということで英雄になっている。また必ずしも周恩来がああ事件のカギを握っていたのではないが、結果的にうまいところだけ周恩来がとってしまったのだと、かなり実証的なことを言っている人たちがたくさんいる。それに周恩来は、軍事的な指導者であった側面とともに、この間亡くなった康生と同じように、長い間特務の指導者でもあったところから、例の上海のフランス租界における共産党の公安関係の責任者として、冷酷な粛清をやった問題などを取り上げる人が

ある。恐らくそれも周恩来の一面であったろうと思います。場合によっては非毛沢東化さえもやろうとしたそのスケールの大きさからすれば、いま明らかにみだされてはまずいようなことも、いろいろ経験して来たんじゃないか。そのすべてを捉えることによって、周恩来の政治的なダイナミズムが浮かび上がるんじゃないかという気がします。

対ソ外交か西側外交か

編集部 もう一つ、中ソ対立という要素が色濃く投影されていたと思うのですが、その辺での絡みはどうでしょうか。

柴田 中ソ対立については、毛沢東の反ソ

ス・レーニン主義の衣を被っているにすぎない。その本心は孔子であり孟子であり、あるいは秦始皇帝である。だからこそ民衆は毛沢東のもとで喘いでいる。従ってこれは打倒してもいいということが書いてあるわけです。

それが公式な形で触れられたことにより、毛沢東としても大いに困ったと思います。つまりそれほど刺戟的な言葉を含み、中国の民衆なり幹部が一様に関心を持つ林彪事件のストリーが流布された。これを流した責任はだれかといえば、やはり周恩来だろうと思う。それを流すことによって、周恩来は毛沢東体制の中での非毛化の一つの布石を凶たという気がする。つまり周恩来の考えとしては、中国の政治のシステムをもっと合理化しなければいけない。要するに文革的要素をできるだけ脱却しなければいけない。そうでなければ中国はとも世界に出られないという認識があったと思う。

階級闘争を忘れた現代の宋江

以上は私の仮説ですが、どうもこういう仮説を立ててみると、非常にその後の事態が説

明できる。というのは、十全大会で周恩来がそういうことを言った時に、片や王洪文がしきりに「反潮流」ということを鼓吹していた。旧幹部の復権を含む脱文革が周恩来の潮流だったが、それに対して反潮流を鼓吹したわけです。そして批林批孔運動が起った。つまり毛が現代の孔孟の道を歩む者だなどと言われると、民衆の中には、これはうまい表現だと思ふ人があると思う。

それに対して、毛沢東はそうじゃないんだ、毛沢東こそ孔子批判、始皇帝批判をしているんだということを説明する必要が出てくる。というのは誰が見ても毛沢東は現代の始皇帝じゃないかという側面があったわけですから……。

また毛沢東にとつては非常にまずいことだけに、実は林彪については初めから腹黒い奴だと思っていたんだという江青夫人への私信を流して、弁解せざるを得なかった。結局毛沢東にとつてあの時期は非常に守勢に立たされた時だったと思う。やがて批林批孔運動から、一九七五年一月の全国人民代表大会を迎えるわけだが、あの全人代前後の雰囲気は、

毛と周が完全に一致していたとは思えない。毛沢東が欠席したりしたのも、要するにそっぽを向いていたような気がする。

従って、そういう複雑な毛と周との関係の後に、水滸伝批判が起ってくる経緯ではないかと思う。いわば周恩来戦略というものの文革派もようやく気付いて、周恩来を撃つべきだ、つまり国内的な階級闘争を忘れていた現代の宋江がいる。国際的な、米中接近に連なる路線は投降主義であると盛んに叫ぶことにより、周恩来に対する批判がそこに含まれていたんじゃないか。

そして決定的なのは、周恩来が亡くなるしばらく前に、魯迅の遺稿集が発見され、これはどうもあれは文革派の動きだと思ふ。

つまり、水に落ちた犬は撃つべし」という徹底的に無慈悲になれ、病氣だと言って同情してはいけないと言わんばかりのキャンペーンが起った。そしてその後、教育革命論争と続く。

こう考えると周恩来は実力もあつたけれど、一方で病氣であつたということは、周恩

主義というのは、劉少奇、鄧小平、周恩来と必ずしも一致していない。

その点での毛沢東と他の指導者との違いをわれわれは見なければならぬし、周恩来亡きあと鄧小平路線の中で中ソ関係を考える上でも、マークしておかなければならないと思う。もちろん、中国民族のロシア民族に対する民族的感情とか、あるいはソ連の大国主義に対する中国人一般の反ソ感情というものも否定できない。しかしそういうものがありながらも、中ソ蜜月時代もあつたわけで、その時代には国境紛争も避けられた。やはり、ソ連と中国の内部の政治状況、政策、あるいはその時のリーダーシップによって中ソ関係の接点は変わってくるので、民族感情だけから永久に中ソ関係は対立し続けると見るべきじゃないと思う。これは今後の中国外交の動きを見る上で重要な点です。

しかし、周恩来が何か政策を変える場合、だれが反対しようが突っ走るとか、全面的に転換するとかということはやらない。その点がまさに周恩来的であつて、毛沢東を含めてなるべく多くのコンセンサスを作り、自分

の軌道に導いていくというやり方、この点の彼の政治力はやはり鄧小平の真似のできないものだと思う。

それから明らかにだれが見ても抵抗がむずかしいというものがいまの中国にはある。その一つは毛沢東自体に対する真正面からの挑戦、これはどうしても無理である。それから文化大革命の正当性——周恩来は心の中では正当と思っていなかったにしろ——に挑戦することは同時に毛沢東への挑戦になるわけで、これはできない。

文革で打倒された代表人物の劉少奇は、まさに現代修正主義者としてやつつけられており、同時にソ連の回し者というか、中国のフリンチョフとして失脚させられた。そういう関連からいくと、対ソ関係をいじるということとは大変なことで、毛沢東の逆鱗に触れる。ですから、外交政策を転換する場合、対ソ関係を優先させる必要があるかどうかを周は考えたと思う。そうだとすれば、国内の政治と密接に絡んでいるソ連との関係は、むしろ爆発しない一定の緊張対立が続いていてもかまわない、それよりもいま急ぐべきはソ連の軍事的

だけではないと思う。

それから旧幹部の復活がある。林彪、陳伯達という毛沢東の後継者及び協力者、あるいは文革の指導者を追い落とし、文革派全体の力を弱め、その中で旧幹部の復活をやり始める。これがやがて鄧小平の復活という頂点を迎える。その時期に教育革命にも変質が起り、教育担当者がこぞって文化革命がいかに中国の大学生の学力水準を下げたかということ公然と非難し始める。これは最近でもまだあるらしい。

そういう意味で、七二年から七三年にかけては、毛沢東の個人崇拜の低下、旧幹部の復活、そして教育革命の変質化ということが並行して進んだということで、脱文革化のピークであつたと思う。その辺は中嶋さんの意見と完全に一致している。

問題は、批林批孔の結末と七五年一月の全国人民代表大会が、議論の分かれるところで

す。つまり批林批孔が周恩来に矛先を向けていたという見方は私は正しいと思う。しかし果して周恩来だけであつたかというところ、それだけではないと思う。

七三年の四月には、鄧小平が副首相として復活して来る。またその時期に、江青女史をた

だから批林批孔は周恩来個人だけでなく穩健派幹部と、自分たち（文革派）が打倒した旧実権派の復活に何らかの歯どめをかけたというとした運動だと思える。

穩健派優位の七五年全人代

ところであの憲法を見ると、明らかに穩健な農業政策を織り込んでいり、長期の工業化構想、それから鄧小平を筆頭副首相にした集団指導体制を作っている。それに、前の党大会と同じように毛沢東個人崇拜を低下させて、毛沢東が考える林彪後の個人的後継者も作らせない。この段階に来るとすでに周恩来

脅威に対して、外交的にこれを牽制することである、あるいは国内の工業化を進めるためにソ連の経済・技術協力が得られないとすれば、西側しかないということになる。この観点からすると、当然アメリカ、日本を中心とする西側外交を切り開くという点に優先順位を付けざるを得ない。周恩来はまさにそれをやったわけです。国際舞台への登場とか、あるいはアジアへの影響力の拡大ということももちろん考えたが、やはり国内の工業化促進とソ連に対する安全保障の確立という点を優先させた。従って、ソ連に対する関係についても毛沢東と周恩来の考え方は違つた。

旧実権派復活への歯どめ

編集部 さき程の中嶋先生の仮説はかなりの重要だと思つたのですが、これについてはどうですか。

柴田 ええ、その点では林彪の失脚、林彪の追い落としは、周恩来のいわば脱文革化戦略が飛躍的に展開できるタイミングだつたと思う。だから七二年の初頭から、林彪の英雄崇拜、英雄史観を批判する形で、毛沢東のイメ

う指示を出している。このプロレタリア独裁を強化せよという毛沢東の四つの指示の扱いはまた極めて複雑です。あれは確か一月末の大会で、その指示が「人民日報」に公表されたのが二月の末。だから大会が終ってその決定を見て、プロレタリア独裁を強化せよという指示を出したのか、あるいは大会の一カ月前ぐらいから憲法の内容、人事、というものが次第に明るみに出て、それで大会に先立って出されたものかという点ではいろいろ見方がある。私はどうやらこれは大会前に出され、それが容れられないので毛沢東は大会をホイコットしたのであろうと見ている。しかし、この指示を全く膺篋に入れちゃうのでは毛沢東の面子も立たないと考えて、大会から一カ月経って出したんじゃないか。このようなことから、「姚文元論文」が三月一日に出て、ブルジョアの権利に批判を加えるが、これは明らかに新憲法の内容を指している。ですから毛と文革派にとって全国人民代表大会は不満であつたと思う。

従って、この時点ですでに周恩来の政治的立場が弱まっているとは私は思えない。大会の全体の決定方向と毛の欠席、プロ独裁強化キャンペーンというのは、明らかに文革急進派の不満から出ているんであって、大会をリードし、その方向を決定した者はやはり周恩来であつたと考えるわけです。そして鄧小平を登場させた一つの力は、周恩来のイニシアティブであつたし、第二の力は党よりも行政府が優位という文革後の政治構造であつたし、第三の力は決定的に軍幹部に負うところが大きい。

だから、七五年の全国人民代表大会には、周恩来は病氣であるにもかかわらず、最後の力を振り絞って、毛・周以後に備える体制を作つた。これこそ周恩来時代の集大成ともいふべきものだろう。七四年の五月から周恩来は入院しておりましたが、外国代表者とも度度会つている。恐らく入院した時点で一回手術をしたと思う。そして七五年の四、五月頃は快方に向つていたという徴候がある。というのは、董必武が死んで葬儀委員会の名簿が発表された時点で、北京発APロイターが、間もなく周恩来は病院から出るだろうとか、あるいはすでに出了たという報道をした。

ところがその葬儀でも恐らく毛沢東が出ないというところで周恩来も出なかつた。その時点で退院したという外電が否定された。こちらが非常に面白い点で、恐らく四、五月頃は私は退院状態にあつたと考える。そして九月に再び病状が悪化した。これは恐らくガンが転移したんだと思うが、この九月から一切の活動の停止ということであつて、今回の、「人民日報」の死亡広告、翌日に各国からの吊電これを何れも二日続いて一面トップで扱っている。また遺体をああいふふうに写した写真を出すという形の扱いはどうも政治的立場が弱まっていたとか、あるいは一部の情報として、病院じゃないところに幽閉されているという説がかなり濃厚に伝えられていたけれど、そういう立場にある人物であつたとすれば、康生や党創立以来の元老であり国家主席代理まで勤めた董必武の死のときと比較にならないケタ外れの紙面の扱いは不自然だろうと思うわけです。

脱文革化潮流と反潮流

中嶋 その辺になるとだいぶ柴田さんと認

識が違つんです。私のさき程の発言の中でニュアンスをもっと正しくしますと、一九七三年の十全大会における周恩来演説というのは、どうも精彩がなかつた。何か本心じゃないような演説だつた。一方、王洪文の方は盛んに「反潮流」ということを言う。周恩来の方は、周恩来らしさのない、非常に無理しているという感じの演説です。

柴田 私は、正直な話、周恩来はまさに自分の独特な考え方とか、あとで証拠物件が残るような演説をしない男だと思ふ。だから当時の情勢を見ながら、毛沢東礼讃、あるいは文化大革命の正当性についても自分の本心とは違うことを演説するのが周恩来だと見ているので、十全大会でも同様だつたと思ふ。そういう意味で、私はそこに周恩来の立場の弱さは見えないんです。

中嶋 私は、あの演説はやっばり周恩来とすれば、何か周恩来らしさ、いわば脱文革を圖り、旧幹部の復活を進め、軍幹部を落す潮流を十全大会でもっと堂々と出してもいいと思ふのですよ。

柴田 周恩来独特のやり方として、やっば

り先ほど言つたように、毛沢東や文化大革命に挑戦するようなことは言わない。(笑)

中嶋 周恩来は言えないけれど、一方、王洪文の方は反発するだけだから非常にやり易いということもあるけれど、反潮流を盛んに言っている。特に林彪のことを取り上げて、いかにも林彪のことを悼むかのように、マルクス・レーニン主義を信奉する共産黨員は、たとえ職を奪われ、地位を失つても、あるいは殺害されても、反潮流で通すべきだつたなどと云っている。それが批林批孔につながつて行つた。それに比べると周恩来は、同じ去年の一月に工業化の問題を提起したのは周恩来らしいと思ふ。その点で周恩来が最後に力を振り絞つたということはまさにその通りだと思ふ。

ただ私は一九七五年一月北京に全人代開催期間の半分ぐらいおりましたが、日本で見ている毛沢東イメージというものと、現実の中国内部で見るとは全然違ふと思ひます。中で感ずるのは、私みたいにある意味で中国の政治の潮流の中にはいろんなものがあるといふふうな、意地悪く見ている人間でも、毛沢

東が棚上げされているとか批判されているということは微塵も感じさせない体制がある。だから日本のナイーブな人たちが行けば、中国というのはまさに毛沢東一元化で動いている、すべてが毛沢東だといふふうな気持ちになつてしまふ。

柴田 それは当然ですね。

党の一元化指導体制の確立

中嶋 そうすると随分そこでも違つてくると思ふけれど、私は去年の全人代では、いろいろの妥協があつたという気がする。むしろ人事面においては文革派が後退し、実務派があつた。

しかしながら憲法を見ると、いま柴田さんが言われたような側面があると同時に、あらゆる点で党の一元化指導というものが憲法の条文に書き込まれた。機構から言つと、全人代は従来、国家の大きな機構だつたが、今度は党の一執行機関となり、党が全人代の上に位置し、その頂点に毛沢東がある。つまり党の一元化指導がずつと實かれたような形をとにかく構成上はとつた。

だから今回恐らく、國務總理を選ぶ場合にも、党中央委員会の大筋に基づいて、初めて全人代が決めるということになる。これは従来の、いわば党と行政が二元的になっていた体制では考えられない。つまりそこにはいわずに党独裁が完全に貫かれたわけだから、柴田さんの説は、党そのものに対するウェイトが軽いんじゃないかと思う。

柴田 私も党独裁を憲法が規定したことはその通りだと思う。ということは、毛沢東によって動かされた中国が、毛沢東以後に備えるとするれば、まさか周恩来や他の國務總理が中心になるということは、だれも言えないので、当然党をもってこなければいけない。もしかしら周恩来や鄧小平もやはり、毛沢東以後には党しか一元的な機能を果せるころはないと思っただけかもしれない。

しかし、それは建前や政治原則であって、実際の機能としては、党とは言いがたも実は党中央を事実上代行してしまう國務院に力を持たしておいた方が、文革派に対しても有利であるという考え方があって、あの憲法は額面通りに受け取れないものがある。つまり

建前と本音が出ているというふうには解釈する。

中嶋 憲法そのものに建前と本音があると言うよりも、憲法そのものが妥協の産物で、毛沢東側の、たとえばストライキ権を与えて造反有理の原則を憲法の中に制度化していったり、党の一元化を貫いたりする動きをみると、やっぱり文革派は名をとって実において譲らざるを得なかったというような気がする。

ですから「人民日報」にしても党の機関紙ですし、また、今回周恩来が党旗に被われて死んでいるということから考えれば、やっぱり党というものは柴田さんの言われるほど相対化し得るものではなく、今後はともかく今のところまだ党の力はあるような気がする。そこが一つの評価の分かれ目だと思います。

もう一つは鄧小平の役割です。私はちょっとその辺は違う見方をしている。柴田さんの見方によると、鄧小平は周恩来の引き上げによって出て来たという……。

鄧小平の復活と張春橋の台頭

中嶋 私ははたして鄧小平はそれだけの人物かという気がする。鄧小平はこれまでの党の組織者あるいは党のいわば書記局政治ができる政治家で、周恩来にしても書記局政治ができる政治家ではない。毛沢東にしてもできない。というよりも毛沢東はそこからはみ出てしまう。周恩来にしても、そんなところよりもっと活動のビヘイビアが別にある。すると、鄧小平は、古いロシア語でアパラチキル党官僚という言葉がピッタリあてはまる書記局政治ができる人間なんです。つまり事務局を握っている者が一番強いというようなことはよくある。鄧小平は実際に、演技はいろいろな人にさせておきながら実をとるといって性質をかなり持っている。

いわばオールド・ボルシェビキに近い正統主義者じゃないかという気がする。ですから、中ソ論争についても、スロロフとわたり合って論争するけれど、いざとなるとソ連は敵ではない、同じ味方の中の相手だということで毛沢東と袂を分かった。つまり

日本共産党の当時の立場と近かったと言っているから、鄧小平と毛・周の関係をみると、周恩来に対しては鄧小平は決して面白い気持ちを持っていない。文革の時、鄧小平がやられている最後の場面を私は見たんですが、そういう態度がありありとしていた。つまり周恩来は仲間だと思っただけで、うまく流れに乗って毛沢東の方へ行っただけで、それを鄧小平ほどの政治家が忘れるはずがない。

同時に鄧小平は毛沢東からかつてひどく罵倒された。ですから毛沢東や江青夫人に対して、彼の深層心理を考えれば、そう簡単にスラスタとスクラムを組むという状況ではない

と同時

と思う。ここに中国のいわば政治構造における非常にパーソナルな問題が重視されなければならない深刻な意味があると思う。確かに鄧小平の復活は、文革派の旧幹部の復権という大きな滔々とした潮流——当時の林彪事件という空白のあとに必要とされて来た客観性、文革の挫折という客観性——のうちに復活したけれど、しかし復活した鄧小平は、必ずしも周恩来の部下ではないし、そして同時に毛沢東ともうまくやって来た。たとえば王海容（毛沢東の姪）が寄り添って初めて、鄧小平の復活が出て来たというのを見られる。同時に鄧小平は出て来た時、ほかの幹部と違って、國務院副總理という肩書

で復活しており、ほかの幹部は大体、羅瑞卿にしてもその他の人にしても、無名での復活である。ということは、副總理として復活するまでにすでにいろいろな問題があったと思う。つまり鄧小平はいわば旧実権派という立場から、毛沢東とも周恩来ともうまく調整をとりながら、両者に対しても完全に一致していかないという第三の道をとった。このことによって今日の鄧小平の位置があると言えると思う。



築地魚市場株式

物価抑制に

貢献する!

事業

卸売事業 附帯事業

資本金・五億円

本社

東京都中央区築地五丁目

二番一号

中央卸売市場

郵便番号 104

電話 (541) 6130

だから周恩来系統の実務派對江青グループの文革派、それに対して鄧小平、張春橋という新旧の実権派というものが今の中国の政治の新しい構造を作っているような気がする。それだけにわれわれは、鄧小平を注目しなければいけないし、張春橋を注目しなければいけないと考えます。

鄧小平は現実的線路を歩む

柴田 ただ鄧小平は周恩来の持っていたような力量に比して劣るところがあるから、やはりより集団指導的性格が強くなるだろう。

それから周恩来のような柔軟なコンセンサスを作っていくための政治力にも若干劣る。だから周恩来が変化球を投げるとすれば、鄧小平はストレートな剛速球で行くかもしれない。そういう鄧小平のアプローチによって、中国内部にギクシャクしたものが起って来る可能性もある。

しかしいまの中国の状況は、工業化の促進、経済建設により国民生活水準を高めなければならぬという非常に大きな要請がある。その国内的要請に加えてソ連とのヘゲモニー争

いと絡みで、西側依存の外交を進めなきゃならないということもある。また、周恩来は革命や階級闘争に疲れて、生活上を望む大衆の要求というものに乗っていたけれど、やはり鄧小平もそれにのらなきゃならない。とすれば工業化・生産優先に対して政治優先・思想優先を叫ぶ文革派に組みすることはできない。逆に工業化を進めるとすれば、大学の教育制度を正常化して、教育革命にブレーキをかけなきゃならん。一方、民衆の物質的要求を抑えれば、生産意欲が落ちる。そうすると物質的刺戟を否定して政治優先を叫ぶ急進派に組みすることになる。ということになると、鄧小平としては急進派に対しての妥協には限度がある。

とすれば、自分の力の基盤の存在するところは党の長老であり、行政幹部であり、そして旧実権派であり、何といっても軍幹部であるということになる。従って全体としては穏健的、あるいは保守的にならざるを得ないんじゃないか。

中嶋 鄧小平は、もともとどちらかというと、大躍進政策に対しても、不満があったが

故に経済政策を進めたわけですが。鄧小平の最近の演説の中で、未公開演説などを見ても、中国はまだまだ遅れているという認識も地道で、農業の機械化、肥料の増産などという点についても非常にまともです。そこはやっぱり鄧小平らしいリアリズムだろうと思う。

柴田 政治優先・思想優先を叫ぶ急進派の動きをそらすために、生産第一主義の軌道へもって来たというパターンは、周恩来のどつたやり方と非常によく似ている。

それから例の大躍進が失敗して、六一年頃から政策転換が行われた時に、「ネズミを取るなら、黒い猫でも白い猫でもいいではないか」——つまり余イデオロギーを問題にするな、いま求められているのは生産性だといった演説があつて、これがために鄧小平は文革中ものすごく叩かれた。

ところが最近の情報によると、またそれを鄧小平が言っているということなので、大体方向としては現実的な路線を歩むと思う。

編集部 ではこの辺で、どうもありがとうございました。(文責編集部)

経済往來

特集 周恩来の光と影

特集 正念場に立つ'76春闘

昭和二十四年四月二十二日
第三種郵便物認可(毎月一回日発行)
昭和二十四年四月二十六日
運輸省特別扱承認第三〇三号
昭和五十一年三月一日発行第二十八卷第三号

経済往來

特集

周恩来の光と影



3

3
1976